

平成 27 年度大牟田市自然環境調査報告書

稲荷山地区 調査



稲荷山地区の自然

平成 28 年 3 月
大 牟 田 市

はじめに

本市では、自然環境の保全を重要な課題として本市の自然環境の現状や貴重な動植物等の生息状況を調査し、自然環境保全の基礎資料とするとともに、市民の啓発に資するために自然環境調査を行っています。

本報告書は、平成 27 年度に、稲荷山地区の自然環境調査を実施したものを取りまとめたものです。

目 次

1	調査目的	1
2	調査分野	1
3	調査実施の期間	1
4	調査区域	2
5	調査ルート	3
6	調査方法	4
7	調査結果	5
	(1) 植生・植物	5
	(2) 鳥類	12
	(3) 昆虫類・クモ類	14
	(4) は虫類・両生類	20
	(5) ほ乳類	21
	(6) 魚介類	23
8	まとめ	25

1 調査目的

本調査は、自然環境保全の基礎資料とするとともに、市民・事業者等の啓発に資するため、実施した。

2 調査分野

調査対象分野は、表1の各分野とし、担当専門委員が調査を実施した。

表1. 調査分野

分 野	担当専門委員
植生・植物	中島 健晴
鳥 類	永江 和彦
昆虫類・クモ類	中嶋 秀利
は虫類・両生類	松永 公幸
ほ 乳 類	尾形 健二
魚 介 類	嶺井 久勝

3 調査実施の期間

以下の日程で実施した。

- 植生・植物・・・・・・・・・・平成27年 9月 7日
- 鳥類・・・・・・・・・・平成27年11月10日
- 昆虫類・クモ類・・・・・・・・平成27年 9月 9日
- は虫類・両生類・・・・・・・・平成27年 9月 5日、19日
- ほ乳類・・・・・・・・・・平成27年 9月 9日
- 魚介類・・・・・・・・・・平成27年 9月30日

4 調査区域

調査地区は、北の隈川と南の白銀川に囲まれた丘陵地帯にある稲荷山とした。

稜線の南側斜面はほとんどが果樹園（みかん畑）として開発されている。

稲荷山の頂上付近も電柵に囲まれた果樹園が広がっており関係者以外はみだりに立ち入ることができない。

稲荷山とその北側の釈迦堂から北東へ延びる丘陵は白銀川源流の吉ヶ浦堤や隈川源流の巡礼淵堤に囲まれた樹林帯である。この付近は道路が樹林帯の中を走っている。梅雨時期の大雨の影響か道路は荒れている。

稜線の北側斜面のうち、頂上の西側は樹林帯と草原のミックスであり、果樹園の開発もそれほど集中していない。稲荷山団地から頂上へ向かう道路が走っているが、途中の舗装は一部荒れている。



図 1. 周辺見取図

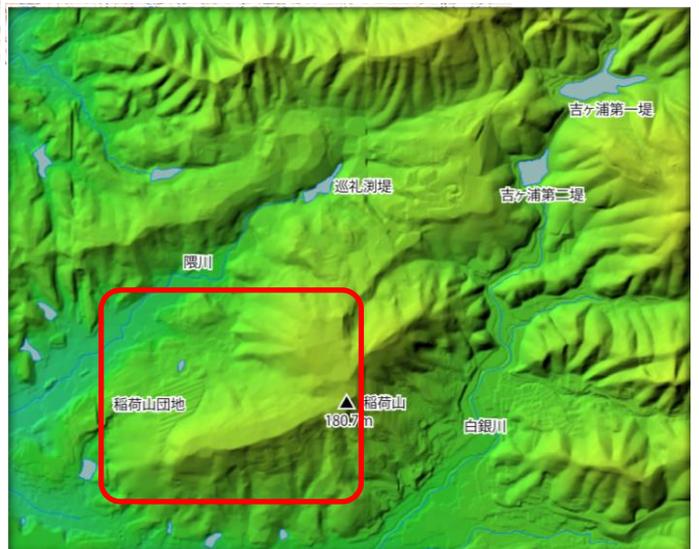


図 2. 色別標高図

5 調査ルート

調査地区「稲荷山地区」のうち、容易に立ち入ることができる、以下に示す稲荷山団地から稲荷山頂上へ向かう稲荷山西側斜面の道路沿いを今回の調査ルートとした。

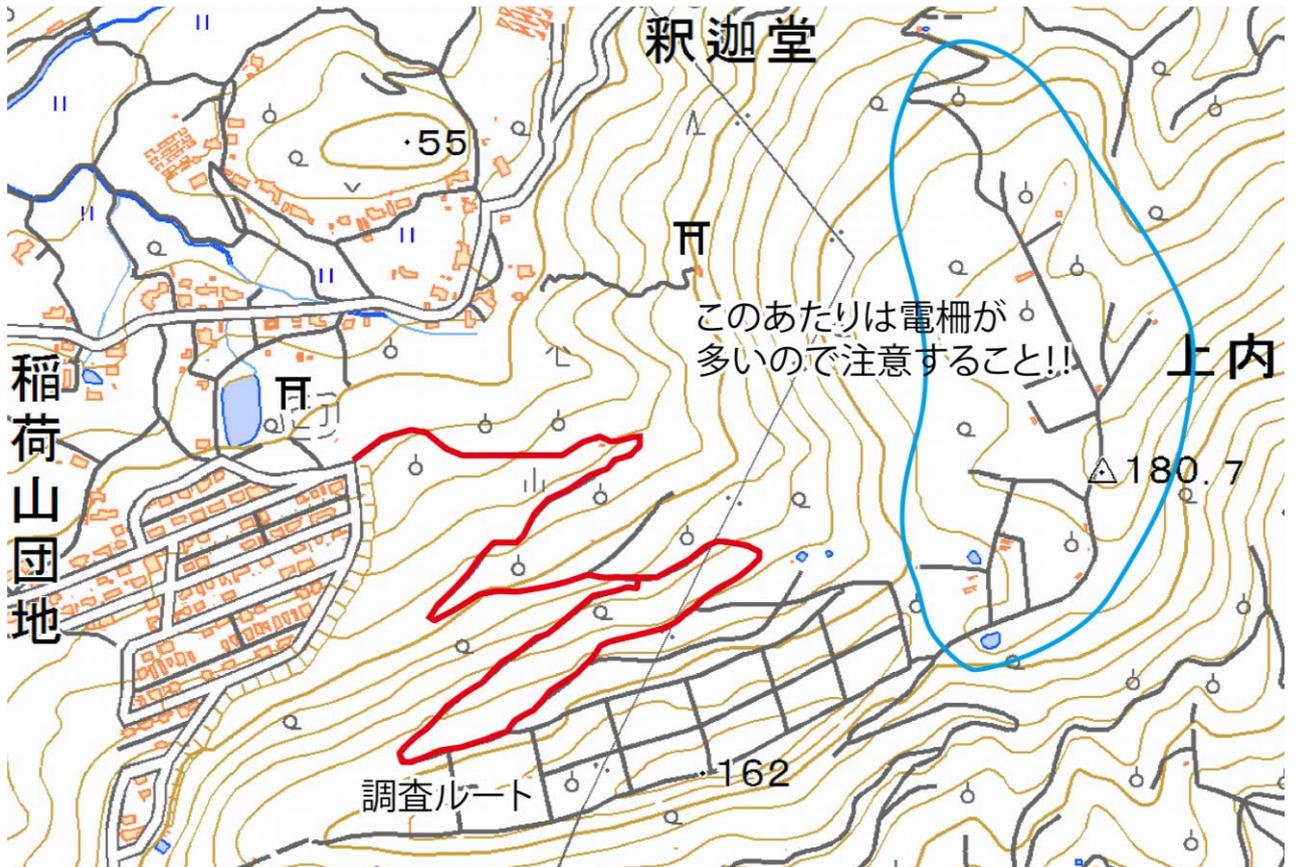


図3. ルート図

ルート諸元

総距離 : 約 1.5 キロメートル

標高差 : 約 90 メートル (標高 55~148 メートル)

状態 : 舗装道路 (普通車通行可能)

その他 : ルートをそれると、特に果樹園周辺には電柵が張り巡らされているため、十分注意を払った。

6 調査方法

調査は現地調査を基本とし、必要に応じて補足調査として聞き取り調査や文献調査等を行うこととした。

確認された生物種は分野ごとに一覧表にまとめた。表中備考欄に記載した記号の意味は以下のとおり。

表2. 表中で使用した記号の意味

記号	用語	意味
I類	絶滅危惧I類	絶滅の危機に瀕している種。
IA類	絶滅危惧IA類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
IB類	絶滅危惧IB類	IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
II類	絶滅危惧II類	絶滅の危険が増大している種。
準絶	準絶滅危惧	存在基盤がぜい弱（弱い）な種で、生息条件の変化によっては、「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。
(国)	環境省レッドリスト	環境省レッドリストを示す。
(県)	福岡県レッドデータ	福岡県レッドデータを示す。
特外	特定外来生物	外来生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるもので、国が指定したもの。
植生植物のみ	木	木本類 「木本類」の略。木本類とは、形成層が発達し木質化するもので、おおまかにいえば年輪を有するもの。ただし、例外として竹の仲間やつる性のもので年輪が無く、形成層が無くとも木本とするものがある。 ⇒草本類は、形成層が無い、あるいはあまり発達せず木質化しないもの。「木」の記載がないものは全て草本類。 つる性植物については、木質化するものを木本類とし、それ以外を草本類とした。 竹については、木本類とはしなかった。
	外	外来植物 人為的に本来生息しない地域に持ち込まれた植物。国内に移入された年代は諸説あるため統一された学会の見解は無いが、ここでは史前帰化と思われるものは含めないこととした。
	逸	植栽逸出 人為的に植栽されたものが、野生化して繁殖したもの。外来種はほとんどが植栽逸出なので、ここでは国産在来の栽培逸出のみ表示した。

7 調査結果

(1) 植生・植物

合計 14 科 27 種のシダ植物、81 科 290 種の種子植物が確認された。

表 3. 植物の調査結果

分類群		科	種
シダ植物		14	27
種子植物	裸子植物	0	0
	被子植物	双子葉類	139
		離弁花類	45
	合弁花類	23	85
	単子葉類	13	66
小計		81	290
合計		95	317

表 4. 確認された主な野生生物（植物）

和名	種類
 <p>アレチヌスビトハギ</p>	<p>(荒地盗人萩、<i>Desmodium paniculatum</i>)は、マメ科ヌスビトハギ属の雑草。北アメリカ原産の帰化植物。</p> <p>果実は4~6個の小節果になるが、ヌスビトハギほど節のくびれが深くない。果実表面にはかざ状の細かい毛が密生していて、衣服などによくくっつく。</p> <p>ヒトや動物など移動するものにくっつくことで生息地域を広めることができる、いわゆる適応である。</p> <p>棘が若干堅くて痛いので、子ども同士のいたずらなどにも用いられる。(出展 Wikipedia)</p>
 <p>ツルボ</p>	<p>(ツルボ、<i>Barnardia japonica</i>)はユリ科の草本。</p> <p>地下に球根があり、秋の初めにピンク色の花を密生した細長い穂を出す。</p> <p>葉は1年に2回出る。まず、春に5-10枚の春葉が出て、これは夏に枯れる。その後初秋に2-3枚の葉が出る。この秋の葉の向かい合った間から花穂が出て、開花する。</p> <p>北海道南西部から九州までと琉球列島に広く分布し、国外では朝鮮、中国本土と台湾、それにウスリーに分布する。</p> <p>林縁や堤防、草地等、日当たりの良いところに多く、往々に群生を作る。(出展 Wikipedia)</p>

表5. 確認された植物

科名	種名 (和名)	備考
シダ植物 (14科27種)		
イノモトソウ科	イノモトソウ	
ウラジロ科	ウラジロ	
	コシダ	
ウラボシ科	ノキシノブ	
	マメヅタ	
オシダ科	イノデ	
	オオカグマ	
	コバノカナワラビ	
	ベニシダ	
キジノオシダ科	オオキジノオ	
コバノイシカグマ科	イワヒメワラビ	
	クジャクフモトシダ	
	フモトシダ	
	ワラビ	
ゼンマイ科	ゼンマイ	
チャセンシダ科	トラノオシダ	
トクサ科	スギナ	
ハナヤスリ科	コヒロハハナヤスリ	
ヒメシダ科	ゲジゲジシダ	
	コハシゴシダ	
	ヒメワラビ	
	ホシダ	
フサシダ科	カニクサ	
	イワガネゼンマイ	
ホウライシダ科	タチシノブ	
	ホラシノブ	

科名	種名 (和名)	備考
種子植物 (81科290種)		
└うち、被子植物 (81科290種)		
└─うち、双子葉類 (68科224種)		
└──うち、離弁花類 (45科139種)		
アカバナ科	コマツヨイグサ	外
	メマツヨイグサ	外
アケビ科	アケビ	木
	ミツバアケビ	木
	ムベ	木
アブラナ科	イヌガラシ	
	タネツケバナ	
イラクサ科	アオミズ	
	カラムシ	
	コアカソ	木
	ヤブマオ	
ウコギ科	カクレミノ	木
	キツタ	木
	タラノキ	木
	ハリギリ	木
	ヤツデ	木
ウリ科	アマチャヅル	
	カラスウリ	
	キカラスウリ	
	モミジカラスウリ	
ウルシ科	ヌルデ	木
	ハゼノキ	木
オシロイバナ科	オシロイバナ	外
カタバミ科	コケオトギリ	
	カタバミ	
	ハナカタバミ	外
キンボウゲ科	ムラサキカタバミ	外
	センニンソウ	木

表5. 確認された植物

科名	種名 (和名)	備考
└─離弁花類 (つづき)		
クスノキ科	カゴノキ	木
	クスノキ	木
	シロダモ	木
	タブノキ	木
	ニッケイ	木・逸※
グミ科	ツルグミ	木
	ナワシログミ	木
クワ科	イスビワ	木
	カナムグラ	
	クワクサ	
	ツルコウゾ	木
	ヤマグワ	木
ザクロソウ科	ザクロソウ	
スベリヒユ科	スベリヒユ	
	ハゼラン	外
	ヒメまつバボタン	外
スマレ科	スマレ	
	タチツボスマレ	
	ツボスマレ	
	ヒメスマレ	
セリ科	ウマノミツバ	
	ツボクサ	
	ノチドメ	
	ミツバ	
センダン科	センダン	木
タデ科	イシミカワ	
	イヌタデ	
	ギシギシ	
	ヒメツルソバ	外
	ママコノシリヌグイ	
	ミゾソバ	

科名	種名 (和名)	備考
└─離弁花類 (つづき)		
ツツラフジ科	アオツツラフジ	木
ツバキ科	サカキ	木
	サザンカ	木
	チャノキ	木
	ヒサカキ	木
	モッコク	木
	ヤブツバキ	木
トウダイグサ科	アカメガシワ	木
	アレチニシキソウ	外
	エノキグサ	
	オオニシキソウ	外
	コニシキソウ	外
	コバノニシキソウ	外
	コミカンソウ	
シナアブラギリ	木・外	
ハイニシキソウ	外	
ドクダミ科	ドクダミ	
トベラ科	トベラ	木
ナデシコ科	ウシハコベ	
	ツメクサ	
ニシキギ科	ツルウメモドキ	木
	マサキ	木
	マユミ	木
ニレ科	アキニレ	木
	エノキ	木
	ムクノキ	木
バラ科	カジイチゴ	木
	カナメモチ	木
	クサイチゴ	木
	シャリンバイ	木
	ナガバモミジイチゴ	木

表5. 確認された植物

科名	種名 (和名)	備考
┌──離弁花類 (つづき)		
バラ科	ナワシロイチゴ	木
	ノイバラ	木
	ピロードイチゴ	木
	フユイチゴ	木
	ヘビイチゴ	
	ヤマザクラ	木
	ユキヤナギ	木・逸
ヒメハギ科	ヒメハギ	
ヒユ科	ヒナタイノコヅチ	
	ホナガイヌビユ	外
フウロソウ科	アメリカフウロ	外
ブドウ科	エビヅル	木
	ツタ	木
	ノブドウ	木
	ヤブガラシ	
ブナ科	アラカシ	木
	コナラ	木
	シリブカガシ	木
	ツブラジイ	木
	マテバシイ	木
ボロボロノキ科	ボロボロノキ	木
マツブサ科	サネカズラ	木
マメ科	アレチヌスビトハギ	外
	クズ	
	シロツメグサ	外
	ツルマメ	
	ナツフジ	木
	ニシキハギ	木
	ヌスビトハギ	
	ネコハギ	
ネムノキ	木	

科名	種名 (和名)	備考
┌──離弁花類 (つづき)		
マメ科	ノダフジ	木
	ハリエンジュ	木・外
	ヤハズソウ	
	ヤブハギ	
	ヤブマメ	
	ヤマフジ	木
ミカン科	カラスザンショウ	木
ミズキ科	アオキ	木
	クマノミズキ	木
ミツバウツギ科	ゴンズイ	木
メギ科	ナンテン	木
	イヌツゲ	木
モチノキ科	クロガネモチ	木
	ナナミノキ	木
	モチノキ	木
	ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ
ヤマモモ科	ヤマモモ	木
ユキノシタ科	コガクウツギ	木
┌──うち、合弁花類 (23科 85種)		
アカネ科	クチナシ	木
	ヒメヨツバムグラ	
	ヘクソカズラ	
ウマノスズクサ科	ウマノスズクサ	
エゴノキ科	エゴノキ	木
オオバコ科	オオバコ	
	ツボミオオバコ	外
ガガイモ科	ガガイモ	
カキノキ科	カキノキ	木
キキョウ科	ヒナギキョウ	
	ミヅカクシ	
キク科	アキノノゲシ	

表5. 確認された植物

No. 4

科名	種名 (和名)	備考
┌──合弁花類 (つづき)		
キク科	アメリカセンダングサ	外
	アメリカタカサブロウ	外
	ウラジロチチコグサ	外
	オオアレチノギク	外
	オオオナモミ	外
	オオキンケイギク	特外
	オオジシバリ	
	オオハルシャギク	外
	オオブタクサ	外
	オカダイコン	
	オニタビラコ	
	ガンクビソウ	
	キクイモ	外
	キバナコスモス	外
	コセンダングサ	外
	セイヨウタンポポ	外
	タカサブロウ	
	ダンドボロギク	外
	チチコグサ	
	ツワブキ	
	トキンソウ	
	ニガナ	
	ハハコグサ	
	ハルノノゲシ	
	ヒメムカシヨモギ	外
	ヒヨドリバナ	
	フキ	
	ベニバナボロギク	外
	ヨメナ	
	ヨモギ	
キツネノマゴ科	キツネノマゴ	

科名	種名 (和名)	備考
┌──合弁花類 (つづき)		
キョウチクトウ科	ケテイカカズラ	木
	ツルニチニチソウ	外
	テイカカズラ	木
クマツヅラ科	アレチハナガサ	外
	クサギ	木
	ハマクサギ	木
	ムラサキシノブ	木
ゴマノハグサ科	ヤブムラサキ	木
	ウリクサ	
トキワハゼ	トキワハゼ	
	サクラソウ科	コナスビ
シソ科	イヌコウジュ	
	カキドオシ	
	キラソウ	
	トウバナ	
スイカズラ科	キダチニンドウ	木
	スイカズラ	木
	ソクズ	
	ニシキウツギ	木
	ニワトコ	木
ツツジ科	シャシャンボ	木
	ネジキ	木
	ヤマツツジ	木
ナス科	アメリカイヌホオズキ	外
	オオイヌホオズキ	外
	ヒヨドリジョウゴ	
フユサンゴ	フユサンゴ	外
	ノウゼンカズラ科	ノウゼンカズラ
ハイノキ科	クロキ	木
	ミミズバイ	木
ヒルガオ科	アメリカアサガオ	外

表5. 確認された植物

科名	種名 (和名)	備考
└─合弁花類 (つづき)		
ヒルガオ科	カロリナアオイゴケ	外
	コヒルガオ	
	ネナシカズラ	
	マルバアメリカアサガオ	外
	マルバルコウソウ	外
	リュウキュウアサガオ	逸
	ルコウソウ	外
ムラサキ科	チシャノキ	木
モクセイ科	ネズミモチ	木
ヤブコウジ科	マンリョウ	木
	ヤブコウジ	木
└─うち、単子葉類 (13科66種)		
アヤメ科	シャガ	外
	ニワゼキショウ	外
イグサ科	クサイ	
イネ科	アキノエノコログサ	
	アシ	
	エノコログサ	
	オヒシバ	
	ギョウギシバ	
	クマザサ	
	コスズメガヤ	外
	コツブキンエノコロ	
	コメヒシバ	
	ササガヤ	
	ササクサ	
	シナダレスズメガヤ	外
	シバ	
	シマスズメノヒエ	外
	セイバンモロコシ	外
	タチスズメノヒエ	外

科名	種名 (和名)	備考
└─単子葉類 (つづき)		
イネ科	チガヤ	
	チジミザサ	
	トダシバ	
	ニワホコリ	
	ネザサ	
	ネズミノオ	
	ヒメイヌビエ	
	マダケ	
	ムラサキネズミノオ	
	メダケ	
	メヒシバ	
メリケンカルカヤ	外	
モウソウチク		
カヤツリグサ科	アイダクグ	
	クグガヤツリ	
	クロテンツキ	
	コゴメガヤツリ	
	シラスゲ	
	テンツキ	
	ナキリスゲ	
	ハマスゲ	
ヒメクグ		
カンナ科	ダンドク	外・逸
サトイモ科	カラスビシャク	
	セキショウ	
ショウガ科	ハナシュクシヤ	外
	ミョウガ	
ツユクサ科	イボクサ	
	オオトキワツユクサ	外
	ヤブミョウガ	
	マルバツユクサ	

表5. 確認された植物

No. 6

科名	種名 (和名)	備考
└─単子葉類 (つづき)		
ヒガンバナ科	サフランモドキ	外
	タマスダレ	外
	ノビル	
	ヒガンバナ	
ヤシ科	シュロ	木
ヤマノイモ科	オニドコロ	
	カエデドコロ	
	ヤマノイモ	
ユリ科	サルトリイバラ	木
	ジャノヒゲ	
	タカサゴユリ	外
	ツルボ	
	ナガバジャノヒゲ	
	ニラ	
	ヤブラン	
ラン科	シュンラン	

※特記事項

クスノキ科のニッケイについては、中国から渡来して栽培されているものと1976年に沖縄北部、久米島、徳之島に分布している事が発表されたものは同種であり、ここでは国産在来の栽培逸出とした。

(2) 鳥類

3目10科14種が確認された。

表6. 確認された主な野生生物（鳥類）

和名	種類
 <p data-bbox="443 987 512 1014">ノスリ</p>	<p data-bbox="754 495 919 521">県：準絶滅危惧</p> <p data-bbox="754 566 1369 624">ノスリ（鷹、学名 <i>Buteo japonicus</i>）は、鳥類タカ目タカ科ノスリ属の1種である。</p> <p data-bbox="754 629 1369 719">従来、ノスリ属の模式種ヨーロッパノスリ <i>Buteo buteo</i> などと同種とされていたが、2008年の分子系統により別種と判明した。</p> <p data-bbox="778 723 1345 750">中央・南シベリア、モンゴル、中国、日本に棲息する。</p> <p data-bbox="754 754 1369 813">夏季は亜寒帯や温帯域で繁殖し、冬季は熱帯や温帯へ渡りをおこない越冬する。</p> <p data-bbox="794 817 986 844">（出典：Wikipedia）</p> <p data-bbox="754 889 1369 947">県内には冬鳥として渡来し、山間部や丘陵地で見られるが、個体数は多くない。春と秋には渡りの個体も通過する。</p> <p data-bbox="754 952 1369 1010">生息地である里山や農耕地、草地の環境悪化、餌となるネズミ類などの小動物の減少などが懸念される。</p> <p data-bbox="754 1014 1369 1072">県内全域の丘陵地や山地、島嶼で越冬する。北九州市平尾台では比較的個体数が多い。</p> <p data-bbox="754 1117 1369 1176">（出典：福岡県の希少野生生物-福岡県レッドデータブック2011-）</p>
 <p data-bbox="432 1805 523 1832">アカモズ</p>	<p data-bbox="754 1211 1015 1238">国：絶滅危惧IB類（EN）</p> <p data-bbox="754 1294 1369 1352">アカモズ（赤百舌、<i>Lanius cristatus</i>）は、動物界脊索動物門鳥綱スズメ目モズ科モズ属に分類される鳥。</p> <p data-bbox="754 1357 1369 1547">夏季に中華人民共和国や日本、ロシア東部、朝鮮半島で繁殖し、冬季になるとインドやインドネシア、東南アジアへ南下し越冬する。日本では亜種シマアカモズが九州南部や南西諸島、亜種アカモズが北海道、本州東部に繁殖のため飛来（夏鳥）し、本州西部、四国、九州では渡りの途中に飛来（旅鳥）、沖縄では越冬のため飛来（冬鳥）する。</p> <p data-bbox="754 1552 1369 1641">全長20cm。嘴の基部から眼を通り後頭部へ続く黒い筋模様（過眼線）が入る。翼は黒い羽毛で覆われ、羽縁は褐色。メスは体側面に鱗状の斑紋が入る個体もいる。</p> <p data-bbox="754 1646 1369 1704">開けた森林や林縁、草原などに生息する。モズと同所に生息する場合は、モズの縄張り間を縫うように生息する。</p> <p data-bbox="754 1709 1369 1767">食性は動物食で、昆虫類、節足動物、両生類、爬虫類、小型の鳥類、小型哺乳類などを食べる。</p> <p data-bbox="754 1771 1369 1830">捕らえた獲物を木の枝等に突き刺し（はやにえ）たり、木の枝股に挟み貯蔵する。</p> <p data-bbox="754 1834 1369 1892">開発による生息地の破壊などにより生息数は減少している。</p> <p data-bbox="794 1906 986 1933">（出典：Wikipedia）</p>

表7. 確認された鳥類

科名	種名 (和名)	備考
スズメ目	(8科11種)	
アトリ科	カワラヒワ	
カラス科	ハシブトガラス	
	ハシボソガラス	
ウグイス科	ウグイス	
ヒタキ科 (ツグミ亜科)	シロハラ	
	ジョウビタキ	
ヒヨドリ科	ヒヨドリ	
ホオジロ科	アオジ	
	ホオジロ	
メジロ科	メジロ	
モズ科	アカモズ	絶滅危惧 IB 類 (国)
ワシタカ目	(1科2種)	
ワシタカ科	ノスリ	準絶 (県)
	ハイタカ	準絶 (国)
ハト目	(1科1種)	
ハト科	キジバト	

(3) 昆虫類・クモ類

9目40科125種の昆虫類、2目14科26種のクモ類が確認された。

表8. 確認された主な野生生物（昆虫類・クモ類）

和名	種類
 <p data-bbox="435 947 555 976">オオミノガ</p>	<p data-bbox="815 501 1002 530">県：絶滅危惧Ⅱ類</p> <p data-bbox="791 580 1394 969">幼虫が各種樹木の葉を摂食する多食性で、鳥などの天敵が少ない市街地や村落などに1955年までは極めて普通で、冬季の枯れ枝先の休眠幼虫は冬の風物詩とまでいわれた。しかし、1955年に日本各地で確認された外来種と思われるオオミノガヤドリバエの寄生によって関東北部、四国南部を除いてほとんど絶滅状態になった。しかし、両種の特殊な分散、寄主探索能力、寄生関係によって現在でも本種のごく少数の集団が県内各地で時折観察され、完全な絶滅には至らない。(出典：福岡県の希少野生生物-福岡県レッドデータブック2014-)</p>
 <p data-bbox="411 1447 579 1476">ナガサキアゲハ</p>	<p data-bbox="791 999 1394 1066">東南アジアとインドネシアの島嶼から、中国、台湾を経て日本まで分布する。</p> <p data-bbox="791 1077 1394 1507">日本での分布域は近畿以南から南西諸島までで、日本では南方系の種類であるが、江戸時代に九州以南に限られていた分布域は拡大しつつある。1940年代には山口県西部や高知県南部、1960年代には淡路島へと徐々に北上し、21世紀初頭には福井県や神奈川県西部の太平洋側での越冬が確認されている。近年は茨城県南西部で2007年に多数確認され、また栃木県南部で2009年に急増するなど、関東北部での増加が顕著で、さらに2009年には福島県いわき市で幼虫、同県伊達市や宮城県名取市で成虫が確認されている。こうした分布の変遷から、本種は温暖化の指標種として注目されている。</p> <p data-bbox="826 1518 1007 1547">(出展 Wikipedia)</p>

表9. 確認された昆虫類・クモ類

No. 1

科名	種名 (和名)	備考
カマキリ目	(1科4種)	
カマキリ科	オオカマキリ	
	コカマキリ	
	チョウセンカマキリ	
	ハラビロカマキリ	

表9. 確認された昆虫類・クモ類

No. 2

科名	種名 (和名)	備考
カメムシ目	(9科15種)	
アオバハゴロモ科	アオバハゴロモ	
	アミガサハゴロモ	
カメムシ科	アオクサカメムシ	
	シラホシカメムシ	
キクグンバイムシ科	キクグンバイ	
セミ科	ツクツクボウシ	
ヘリカメムシ科	ハリカメムシ	
ホソヘリカメムシ科	クモヘリカメムシ	
	ホオズキカメムシ	
	ホソヘリカメムシ	
マキバサシガメ科	ハネナガマキバサシガメ	
	ヨコツナサシガメ	
マルカメムシ科	クヌギカメムシ	
	マルカメムシ	
ヨコバイ科	ツマグロヨコバイ	
コウチュウ目	(2科10種)	
オサムシ科	キマワリ	
	クビボソゴミムシ	
	ナナホシテントウ	
	ヒメオサムシ	
	ヨモギハムシ	
センチコガネ科	アオドウコガネ	
	コアオハナムグリ	
	センチコガネ	
	ビロウドコガネ	
	ミイデラゴミムシ	
ゴキブリ目	(1科1種)	
チャバネゴキブリ科	モリチャバネゴキブリ	
チョウ目	(12科47種)	
アゲハチョウ科	アオスジアゲハ	
	アゲハ	
	キアゲハ	

表9. 確認された昆虫類・クモ類

No. 3

科名	種名 (和名)	備考
チョウ目	(つづき)	
アゲハチョウ科	クロアゲハ	
	ジャコウアゲハ	
	ナガサキアゲハ	
	モンキアゲハ	
シジミチョウ科	ウラギンシジミ	
	ツバメシジミ	
	ベニシジミ	
	ムラサキシジミ	
	ヤマトシジミ	
シャチホコ科	モンクロシャチホコ	
ジャノメチョウ科	クロノマチョウ	
	クロヒカゲ	
	ヒメウラナミジャノメ	
	ヒメジャノメ	
シロチョウ科	キタキチョウ	
	スジグロシロチョウ	
	モンシロチョウ	
スカシバ科	ブドウスカシバ	
スズメガ科	フクラスズメ	
	フタトガリコヤガ	
	ホシヒメホウジャク	
	ホシホウジャク	
セセリチョウ科	イチモンジセセリ	
	キマダラセセリ	
	クロセセリ	
	ダイミョウセセリ	
	チャバネセセリ	
タテハチョウ科	アカタテハ	
	インガキチョウ	
	イチモンジチョウ	
	キタテハ	

表9. 確認された昆虫類・クモ類

No. 4

科名	種名 (和名)	備考
チョウ目 (つづき)		
タテハチョウ科	ゴマダラチョウ	
	コミスジ	
	タテハモドキ	
	ツマグロヒョウモン	
	ヒメアカタテハ	
	ルリタテハ	
ドクガ科	カノコガ	
	チャドクガ	
	ユウマダラエダシヤク	
ミノガ科	オオミノガ	絶滅危惧Ⅱ類 (県)
	シバミノガ	
	チャミノガ	
ヤガ科	オオトモエ	
トンボ目 (3科12種)		
オニヤンマ科	オニヤンマ	
	ギンヤンマ	
トンボ科	ウスバキトンボ	
	オオシオカラトンボ	
	シオカラトンボ	
	タイリクアカネ	
	ネキトンボ	
	ノシメトンボ	
	ハグロトンボ	
	マユタテアカネ	
モノサシトンボ		
ヤンマ科	カトリヤンマ	
ハエ目 (4科10種)		
アシナガバエ科	マダラアシナガバエ	
クロバエ科	オオクロバエ	
ガガンボ科	ミカドガガンボ	
	ミスジガガンボ	

表9. 確認された昆虫類・クモ類

No. 5

科名	種名 (和名)	備考
ハエ目 (つづき)		
ハナアブ科	オオハナアブ	
	キンバエ	
	シマハナアブ	
	ハナアブ	
	ヒメヒラタアブ	
	ホソヒラタアブ	
ハチ目 (2科8種)		
ズメバチ科	オオスズメバチ	
	キイロスズメバチ	
	クロスズメバチ	
	コガタスズメバチ	
	フタモンアシナガバチ	
ミツバチ科	セイヨウミツバチ	
	トラマルハナバチ	
	ニホンミツバチ	
バッタ目 (6科18種)		
イナゴ科	ツチイナゴ	
	ハネナガイナゴ	
オンブバッタ科	オンブバッタ	
キリギリス科	キリギリス	
	クサキリ	
	クビキリギリス	
	ホシササキリ	
	サトクダマキモドキ	
	セスジツユムシ	
ヒシバッタ科	ハネガガヒシバッタ	
	トゲヒシバッタ	
コオロギ科	エンマコオロギ	
	ハラオカメコオロギ	
	ミツカドコオロギ	

表9. 確認された昆虫類・クモ類

No. 6

科名	種名 (和名)	備考
バッタ目	(つづき)	
バッタ科	イボバッタ	
	ショウリョウバッタ	
	トノサマバッタ	
クモ形綱 クモ目	(1目13科25種)	
アシナガグモ科	アシナガグモ	
	チュウガタシロカネグモ	
	ヤサガタアシナガグモ	
カニグモ科	アズチグモ	
キンダグモ科	アズマキシダグモ	
	スジプトハシリグモ	
コガネグモ科	オニグモ	
	コガネグモ	
	ゴミグモ	
	ジョロウグモ	
	ドヨウオニグモ	
	ナガコガネグモ	
	ワキグロサツマノミダマシ	
コモリグモ科	ウズキコモリグモ	
	ハラクロコモリグモ	
ササグモ科	ササグモ	
ジグモ科	ジグモ	
タナグモ科	コクサグモ	
ハエトリ科	アオオビハエトリ	
	カラスハエトリ	
	ネコハエトリ	
ヒメグモ科	オオヒメグモ	
ヒラタグモ科	ヒラタグモ	
フクログモ科	カバキコマチグモ	
ユウレイグモ科	ユウレイグモ	
クモ形綱 ザトウムシ目	(1目1科1種)	
※ ザトウムシの一種を確認したが、種名は不明。		クモの仲間ではなくダニ類に近い

(4) は虫類・両生類

2目4科4種のは虫類、1目2科2種の両生類が確認された。

表10. 確認された主な野生生物（は虫類・両生類）

和名	種類
 <p data-bbox="432 891 616 913">ニホンアマガエル</p>	<p data-bbox="850 528 1369 595">体長は2.0-4.5センチメートル程で、メスの方が大きく、通常オスは4センチメートル以下。</p> <p data-bbox="850 600 1369 891">体色は腹側が白色で、背中側が黄緑色だが、背中側は黒っぽいまだら模様の灰褐色にも変えることができ、保護色の一例としてよく知られる。似た体色のものにシュレーゲルアオガエルやモリアオガエルがあるが、体が小さく、体の横に褐色の帯があること、特に、目から鼻にかけて褐色の帯がでること、灰褐色の体色ではまだら模様が出ること、などで区別できる。（出展 Wikipedia）</p>
 <p data-bbox="456 1361 592 1384">ニホントカゲ</p>	<p data-bbox="850 981 1369 1048">全長 15-27cm、頭胴長 6-9.6cm。胴体中央部の斜めに列になった背面の鱗の数（体列鱗数）は26。</p> <p data-bbox="850 1052 1369 1232">幼体は体色が黒や暗褐色で5本の明色の縦縞が入る。尾は青い。オスの成体は褐色で、体側面に茶褐色の太い縦縞が入る。繁殖期のオスは側頭部から喉、腹部が赤みを帯びる。メスは幼体の色彩を残したまま成熟することが多い。</p> <p data-bbox="850 1236 1369 1348">草原や山地にある日当たりの良い斜面等に生息する。冬季になると日当たりの良い斜面の地中や石垣等で冬眠する。（出展 Wikipedia）</p>

表11. 確認されたは虫類・両生類

科名	種名(和名)	備考
爬虫綱 カメ目	(1科1種)	
ヌマガメ科	ミシシippアカミミガメ	外
爬虫綱 有鱗目	(3科3種)	
ナミヘビ科	シマヘビ(カラスヘビ)	
カナヘビ科	ニホンカナヘビ	
トカゲ科	ニホントカゲ	
両生綱 無尾目	(2科2種)	
ヌマガエル科	ヌマガエル	
アマガエル科	ニホンアマガエル	

(5) ほ乳類

3目4科6種のほ乳類が確認された。

表12. 確認または生息の可能性が高い主な野生生物（ほ乳類）

和名	種類
 <p data-bbox="480 987 568 1014">アナグマ</p> <p data-bbox="228 1032 823 1122">2015年10月15日、みやま市山川町北関（大牟田市との境界付近）で赤外線センサーカメラにより自動撮影されたもの</p>	<p data-bbox="847 524 1011 551">県：準絶滅危惧</p> <p data-bbox="847 600 1407 703">国内では本州、四国、九州に生息する。ずんぐりした体つきで耳介は短い。四肢の爪は長く湾曲している。頭胴長52cm、尾長14cm、体重12kg程度。</p> <p data-bbox="847 712 1407 775">日本産アナグマはニホンアナグマとして亜種に区分される。</p> <p data-bbox="847 784 1407 999">山地帯下部から丘陵部の森林、灌木林に生息する。土壌動物や小動物をおもに捕食する。交尾は4～7月で翌年春に出産する。生息情報は全国的に減少しており、2001年版のRDBでは「準絶滅危惧」に指定された。2011年版では指定からはずれたが今後も注意深く動向を見守っていく必要がある。</p> <p data-bbox="847 1048 1407 1111">(出典：「日本の哺乳類 [改訂版]」阿部永監修、「福岡県レッドデータブック 2011」)</p>
 <p data-bbox="464 1675 584 1702">ニホンジカ</p> <p data-bbox="248 1738 735 1800">2015年11月2日、四箇（九州自動車道の西）撮影：上原與礎一氏</p>	<p data-bbox="847 1196 1407 1299">ベトナムから極東アジアにかけて広く自然分布する。ヨーロッパ、ニュージーランド、アメリカには人為的に導入され野生化している。</p> <p data-bbox="847 1308 1407 1523">夏毛は茶色で白斑があり、冬毛は灰褐色。雄は角をもち毎年生えかわる。体のサイズは亜種や生息地によって大きく異なる。国内では最大はエゾシカ、最小はヤクシカで、体重は雄50～130kg、雌25～80kg、頭胴長は雄90～190cm、雌90～150cm、肩高は雄70～130cm、雌60～110cm。</p> <p data-bbox="847 1532 1407 1671">森林から完全に離れて生活することはなく、パッチ状に草地が入り込んだ森林地帯に多く生息する。出産期は5月下旬～7月上旬で通常1仔を出産する。交尾期は9月下旬～11月で妊娠期間は約230日。</p> <p data-bbox="847 1680 1407 1818">九州では、1960年頃には限られた地域だけで確認され絶滅の危機にあると言われた。しかし、その後増え始め福岡県でも1990年頃から食害が目立つようになった。</p> <p data-bbox="847 1868 1407 1930">(出典：「日本の哺乳類 [改訂版]」阿部永監修、「福岡県レッドデータブック 2011 (普及版)」)</p>

表 1 3 - 1. 確認されたほ乳類

科 名	種 名 (和 名)	備 考
食虫目 (モグラ目)	(1科2種)	
モグラ科	コウベモグラ	トンネルを確認
	ヒミズ	トンネルを確認
食肉目 (ネコ目)	(2科3種)	
イタチ科	アナグマ	食べ物を探した跡を確認
	テン	糞を確認
イヌ科	タヌキ	赤外線センサーカメラで撮影
偶蹄目 (ウシ目)	(1科1種)	
イノシシ科	イノシシ	親子の足跡および食べ物を探した跡を確認

表 1 3 - 2. 生息の可能性が高いほ乳類

科 名	種 名 (和 名)	備 考
兔目 (ウサギ目)	(1科1種)	
ウサギ科	ニホンノウサギ	上内峠で轢死体が見つかる
齧歯目 (ネズミ目)	(1科1種)	
リス科	ムササビ	準絶 (県)、 食痕らしきもの (コナラの枝) を確認
偶蹄目 (ウシ目)	(1科1種)	
シカ科	ニホンジカ	竹の葉にシカの食痕と思われるものを確認、 鳴き声の情報あり

(6) 魚介類

2目2科2種の魚類、2目3科4種の貝類、2目3科3種の甲殻類が確認された。

表14. 確認された主な野生生物（魚介類）

和名	種類
 <p data-bbox="475 1039 568 1066">カワムツ</p>	<p data-bbox="826 510 1407 689">カワムツ（川鯉、<i>Nipponocypris temminckii</i>）は、コイ科に分類される淡水魚の一種。西日本と東アジアに分布し、分布域ではオイカワやウグイなどと並んで身近な川魚の1つである。成魚の体長は10-15cmほど。オスがメスより大きく、大型のオスでは全長20cmに達して30cm近くになることもある。</p> <p data-bbox="826 698 1407 788">食性については、水生昆虫や水面に落下した昆虫、小型甲殻類、小魚などを捕食するが、藻類や水草も食べるといふ動物食性の強い雑食性である。</p> <p data-bbox="826 797 1407 945">日本では能登半島と天竜川水系以西の本州、四国、九州に分布し、日本以外では朝鮮半島、中国、台湾にも分布する。日本ではアユやゲンゴロウブナなど有用魚種に紛れて放流されることにより、東日本にも分布を広げている。</p> <p data-bbox="826 954 1407 1079">川や湖沼などに生息するが、ヌマムツやオイカワよりも水がきれいな所を好み、その中でも水流が緩い所を好む。岸辺の植物が水面に覆いかぶさったような所に多く、人が近づくと茂みの陰へ逃げ込む。</p> <p data-bbox="868 1115 1059 1142">(出典：Wikipedia)</p>
 <p data-bbox="440 1921 600 1948">ツクシマイマイ</p>	<p data-bbox="826 1200 1407 1348">ツクシマイマイ（筑紫蝸牛）、学名 <i>Euhadra herklotsi</i> は、有肺目オナジマイマイ科に分類されるカタツムリの一種。日本の九州を中心に、その周辺や韓国南部の済州島まで分布する。標準和名の「ツクシ」は九州の古称「筑紫」に由来する。</p> <p data-bbox="826 1357 1407 1447">九州と山口県西部、愛媛県の佐田岬半島、長崎県の五島列島・壱岐・対馬、鹿児島県の甬島列島、韓国の済州島などに分布する。</p> <p data-bbox="826 1456 1407 1581">殻は右巻き、日本産カタツムリとしては比較的大型で、一般には殻高20~24mm・殻径30~40mm程度、特に大型のものでは殻高29mm・殻径47mmほどになり[6]、分布域内ではコベソマイマイと並ぶ最大のカタツムリである。</p> <p data-bbox="826 1590 1407 1671">主として森林内~林縁に生息し、日中は落葉や朽木の下に潜み、あるいは樹幹や樹上の葉などに付着して休止し、夜間や降雨時などに這い出て活動する。</p> <p data-bbox="826 1680 1407 1895">餌は主として枯葉などの植物遺骸や樹皮、物の表面に生じた藻類などであるが、森林に近接した農耕地では作物を食べて害を与えることもある[1]。雌雄同体で、他の個体と交尾して遺伝子交換をし、落葉層下や地中に産卵する。卵は数ミリの白色真球状で、炭酸カルシウムの卵殻をもつ。仔貝は殻をもった小さいカタツムリの姿で孵化し、親と同様に匍匐して餌を摂りながら成長する。</p> <p data-bbox="868 1930 1059 1957">(出典：Wikipedia)</p>

表 15. 確認された魚介類

科 名	種 名 (和 名)	備 考
脊索動物 (魚類)	(2目2科2種)	
コイ目	(1科1種)	
コイ科	カワムツ	
スズキ目	(1科1種)	
ドンコ科	ドンコ	
軟体動物 (貝類)	(2目3科4種)	
吸腔目	(1科1種)	
カワニナ科	カワニナ	ゲンジボタルの幼虫の餌。
有肺目	(2科3種)	
オナジマイマイ科	ウスカワマイマイ	
	ツクシマイマイ	
モノアラガイ科	モノアラガイ	
節足動物 (甲殻類)	(2目3科3種)	
十脚目	(2科2種)	
サワガニ科	サワガニ	
テナガエビ科	スジエビ	
端脚目	(1科1種)	
ヨコエビ科	ニッポンヨコエビ	

8 まとめ

今回の調査では、のべ177科503種の生物が確認された（表16参照）。

表16. 調査結果まとめ

	目	科	種
植生・植物		95	317
鳥類	3	10	14
昆虫類	9	40	125
クモ類	2	14	26
は虫類	2	4	4
両生類	1	2	2
ほ乳類	3	4	6
魚類	2	2	2
貝類	2	3	4
甲殻類	2	3	3
合計	26	177	503

また、4種の希少野生生物が確認された（表17参照）。

表17. 確認された希少野生生物まとめ

	I類(国)	I B類(国)	II類(国)	準絶(国)	その他
植生・植物					
鳥類		アカモズ		ハイタカ	ノスリ【準絶】
昆虫類					オオミノガ【II類】
両生類					
ほ乳類					
貝類					

※ 表中各列のタイトルは環境省のレッドリストの分類を表し、【】内は、福岡県のレッドデータの分類を表す。

今回は、稲荷山地区の調査を行った。調査回数は各分野1回程度にとどまったものの、4種の希少野生生物を含む503種の生物を確認できた。

今後、稲荷山地区の自然環境の状況についてさらに把握を進めるためにも、さらなる調査の積み重ねが求められる。

発行日／平成28年3月

編集・発行／大牟田市環境部環境企画課

〒836-8666 大牟田市有明町2丁目3番地

TEL : 0944 (41) 2738 FAX : 0944 (41) 2722